

形象なき文化遺産としての狩猟技術

キルギス共和国イシク・クル湖岸における鷹狩猟のエスノグラフィ

相馬 拓也

早稲田大学大学院

I. イヌワシ：天山・アルタイ牧畜社会における「第六の家畜」

鷹狩とはタカ・ハヤブサ、ワシなどの猛禽を捕獲・馴養し、狩猟の訓練を施すことで、人間に代わって獲物を捕獲させる特殊な狩猟形態である。タカ・ハヤブサ類を用いて、野鳥やウサギなどの小動物の狩りを行う鷹狩は、一般的には趣味や娯楽狩猟と考えられる場合が多い。実際に西欧、アラブ諸国、日本などのいずれの地域においても、王侯貴族や上流階級でのエンターテインメントとしての傾向が強い。しかし、天山・アルタイ山岳地帯の遊牧社会では、大型のイヌワシ（写真1）がわずかながら鷹匠たちによって飼養され、かつては冬季の生活を支える実猟として使役されていた。とくにキルギス・カザフの牧畜社会でいまでも行われている鷹狩活動は、牧畜民たちの娯楽であると同時に、実猟としての2つの性格をもっている。羽根を広げると2mにも達する大型の猛禽イヌワシは、タカ・ハヤブサ類などによる捕獲が困難な、キツネ、アイベックス、ヘラジカなどの大型の草食獣などの捕獲を可能とする。さらに、ときにはオオカミまでも捕食の対象とする最強の猛禽である。この最強の空の覇者を飼いならし、狩猟に使役するキルギス・カザフの牧畜社会では、イヌワシは五畜に連なる「第六の家畜」と定義することも、実際にはそれほど大げさなことではない。

天山・アルタイ山脈には、いくつもの王朝や遊牧国家の勃興と断絶があったにもかかわらず、鷹狩猟は断絶することなく、数千年にわたって連綿

と受け継がれてきた。その理由は、娯楽と実利を兼ね備えた、生活に密着した生業活動であったからでもある。

本稿は2006年5～6月、10～11月にキルギス共和国のイシク・クルの南北湖岸周辺で行った、鷹狩猟と鷹匠の現状を概観した生態人類学的調査にもとづくものである。天山・アルタイ山脈の鷹狩猟を主題とした体系的な研究は、今のところほとんどないと言ってもよい。本調査は、モンゴルの遊牧生活における農耕や狩猟の必然性を明らかにした吉田〔2005〕や、東アフリカの遊牧活動における農耕、採集、交易の関連などに言及した佐藤俊などによる、遊牧社会の生業複合という視点を出発点にしている〔佐藤（編）2002：6-7〕。そのためキルギスの牧畜活動と鷹狩猟の関連を調査することに、当初の焦点が設定されていた。しかし現在のキルギスにおける鷹狩猟活動は極端に減少し、牧畜民が生業として営む遊牧活動（季節移動）とは相互依存的な関係にはなくなっている。

そのため、消失の窮状にある特殊な狩猟技術を「伝統」として維持・再生する、文化遺産としての地平を見出すことに、鷹狩猟研究のより深い価



地図1 キルギス共和国の地図

値があると考えられる。この意味で、私の視点はG・マーカスやJ・クリフォード〔1996、2003〕などが繰り返し批判した、特権的な研究者による「文化救済」の民族誌という文脈を十分に意識するものでもある。しかし「遺産価値」というたとえ外付けのあつらえでも、少なからずそれが現地社会の誇りにもなるということまでもが民族誌家の介入措置だとすると、異文化を認め合うという有機的な活動すら停滞してしまうように思われる。本稿は鷹狩猟を文化遺産として定義するための、きわめて初期段階の現状報告であり、やがてそれがキルギス人自身の手により「文化資源」として積極的に活用されるための基礎作業である。今回の短い予備的な報告では、今までそれほど注目されることのなかった実猟としての側面にやや重きをおいて報告する。さらにキルギスにおけるその窮状についてもあわせて報告したいと思う。

II. キルギスにおける鷹狩猟の現状

(1) イシク・クル湖畔の鷹匠たち

キルギス人（またカザフ人）のあいだで行われる鷹狩猟は、おもに大型のイヌワシ〔golden eagle〕を使役し、騎馬によって狩猟活動を行う「騎馬鷹狩猟」である。一方で小型のタカ・ハヤブサ類は、主として娯楽狩猟に用いられ、現在では実猟に用いられることはほとんどない。そのた



写真1 若いイヌワシ

めキルギス・カザフ語では「鷹匠」を「ベルクッチ（Beruktchy：鷲使い）」と呼びあらわす。つまりより正確に言うと「鷲狩猟（わしがりりょう）」である。またタカ・ハヤブサ類の使い手は「クシュッチ（Kushtchy：鳥使い）」と総称され、イヌワシ使いとは意識的に区別されている。

キルギス共和国内において、実猟としての鷹狩猟は現在ほぼ消滅しつつある。タカ・ハヤブサ類などの猛禽類を所有して、余暇に娯楽狩猟を楽しむ「鷹狩」を行う鷹匠ですら、若干名が確認されているに過ぎない。筆者の独自調査の限りでは、キルギス北部と東部合わせても鷹匠の総数は30名程度であった。そのうちの2/3近いおよそ20名がイシク・クル周辺に集中していることが確認されている。調査地として滞在したイシク・クル北西岸部では、12名の鷹匠が確認されている。そのうちベルクッチが6名、他の6名がクシュッチであった。ベルクッチのうち2人は、かつて鷹狩猟を行っていたという古老である。この2人の年齢は89歳と79歳と高齢なため、現在では猛禽を所有してはいない。また12名のうちには4人の鷹取り（サヤッチ）が含まれている。普段の彼らはリング農家や牧草農家として生計を立てているが、いまでも秋口になるとカザフスタンとの国境のクンゲイ・アラ・トー山中で鷹取を行っている。彼らは口をそろえて「秋の高い空をみるとワシやタカを獲りたくてうずうずする」と語ってくれた。現在、季節移動を行いながら鷹狩猟を行っている牧畜民（チャバン）は、イシク・クル北岸で1家族が確認されているにすぎない（所有するイヌワシは1羽）。その近所にも兄弟でイヌワシとタカを所有する鷹匠が2名いる。しかし彼らはチャバンではなく、年間を通じた職業猟師であり、銃による狩猟が主である。そのためイヌワシの所有は、娯楽であるとのことであった。

イシク・クル南岸には、キルギスの鷹匠では顔役的な存在のサグンバイ氏が、今でも5羽の猛禽を所有している。しかし氏もすでに鷹狩猟を生業

とはしてはいない。この町には、夏季に恒例となりつつあるバード・ショーなどへの参加を目的に、つい最近猛禽を所有しはじめたという商用の鷹飼いが数名確認されている。キルギスにおける鷹匠の数は年々減少の傾向にあり、この原因については後で述べることとする。

(2) イヌワシの飼養

鷹狩猟に使役されるイヌワシは、体高は約 90 cm になり、大きいもので両翼の幅は 2 m を越す大型の猛禽である。天山山中の開けた高地では、放牧地や山裾で突如として巨大な影が牧草に映え、見上げると大空を舞うイヌワシが頭のすぐ上をかすめているということも、決して珍しいことではない。イヌワシの捕獲は、巣から雛を捕獲する場合や、1 歳程度の若鶏を捕獲する場合、2～3 歳程度の成獣を捕獲する場合などがある。イヌワシの年齢によって訓練期間は異なるが、多くの鷹匠は飛行が安定する 1 歳程度の若鶏を飼育することを好んでいる。腕のいい鷹匠ならば、若鶏は最短で 45 日程度の訓練で狩猟に使役させることができる。ちなみにタカやハヤブサは、7 日から 10 日程度の訓練で狩猟に用いることができる。

イヌワシの飼養方法を、イシク・クル南岸のボコンバエヴァ村に在住する熟練したベルクッチ、サグンバイ氏の方法をもとに紹介してみたい（写真 2）。鷹狩猟は毎年 9 月末頃の秋口から開始さ



写真 2 サグンバイ氏とメスワシ

れる。これは牧畜民が家畜を連れて山を降り、冬営地での冬支度をはじめめる時期でもある。狩猟の前にイヌワシには食餌制限が施される。餌の肉を与える際も、水洗いして血抜きした肉を与える。鷹匠たちはイヌワシを極限の空腹状態に追い込むことで、本能的に狩猟へと駆り立てている。実際の狩猟で獲物を得たとしても、鷹匠たちはイヌワシに 200～300 グラム程度を食べさせると、すぐに獲物から引き離してしまう。満腹になると狩猟をしなくなるからである。鷹匠たちは厳寒の環境でイヌワシの体調を維持しながら、食餌を制限するバランスに、冬のあいだ常に気を使わなければならない。

狩猟シーズンは長くとも 3 月末までで、この期間に鷹匠は週 2～3 回のペースでイヌワシを連れて狩場へと向かう。狩猟活動はイヌワシと乗用馬の疲労回復を考慮すると週 3 日が限度で、毎日継続されることはない。それでも平均すると一冬で 70 日程度を鷹狩猟活動に費やすことになる。イスラームであるキルギスの鷹匠は、金曜日に鷹狩猟に行くことを好まない。そのために土・日・月・火曜日が、狩猟に向いていると話す鷹匠もいるが、決してこれに限ってはいない。

毎年気温の上がり始める 3 月に入ると、おもな捕獲対象とされるキツネは、出産と毛の生え替わりにともない毛皮の質が下がり、換金価値が低下する。そのため、鷹狩猟はこの期を境に 3 月末ではほぼ終了する。また春を迎えてイヌワシ自身も、気温の上昇にともない全身の羽根が全て抜け替わる「トォウル」という期間に入る。このため 4 月～8 月末にかけて飛翔が安定しなくなり、実猟に従事させることが難しくなる。これはタカやハヤブサなどの猛禽類全般に起こる生理現象である。タカ・ハヤブサ類を飼養するクシュッチたちは、春になると一冬をとともに過ごしたタカやハヤブサを山に放し、次の冬までに再び新たな相棒を探し始める。

夏季のイヌワシの飼養方法は冬場とは異なり、



写真3 ウサギを捕食するイヌワシ

ほぼ毎日ハトやウサギを給餌しなければならない(写真3)。イヌワシを太らせる事で、羽根の生え替わりを促進することができるためである。餌となるハトは、ボコンバエヴァのバザールで1羽100ソム(約300円)程度で売られている。毎日の給餌を8月末まで続けると、単純計算で100ソム×5ヶ月(150日)でおおよそ15,000ソム(45,000円程度)が必要となり、夏季のイヌワシの維持だけでもかなりの出費を強いられる。ベルクッチによっては、身近にいる野鳥やウサギを自ら捕獲して、出費の負担を軽減していることもある。

さらにイヌワシは3,000mを超える高山を棲息地としており、産卵や子育ても高地でおこなっている。そのため夏場の高気温にさらされることに、それほど強い動物ではない。標高2,000mに位置するイシク・クル湖岸でも、夏場は連日30度を越えることは珍しくはない。かつてベルクッチの多くは移牧活動を生業とした牧畜民であった。そのため牧草の繁茂する初夏5月末から6月にかけて、彼らはイヌワシを連れて涼しい夏営地へ移動をおこなっていた。このような移牧活動はイヌワシの体調管理にもすぐれて有益であった。夏牧場は水利と牧草に恵まれており、イヌワシの餌となる野生動物にも恵まれた天然の狩場になる。そのためイヌワシの体調管理とともに、トレーニングを兼ねた捕食活動を行わせることで、飼養と維持



写真4 騎馬鷹狩猟の風景

に掛かる負担を軽減することが可能であった。高低差を利用した移牧活動は、鷹狩猟とも完璧に調和した合理的な生業活動でもあったといえる。

Ⅲ. 鷹狩猟(イヌワシ狩猟)の生産性

天山・アルタイ山脈で行われる鷹狩猟は、結論から先に言って、その経済価値と生産性はかなり高かった。鷹狩猟はキツネやオオカミなどの毛皮の販売を目的としており、「現金化」を見越した高価な毛皮獣の捕獲に、その活動の意義が集約されている(写真4)。少なくともソヴィエト化した最近100年間の傾向として、鷹狩猟による「あがり」は、冬季の毛皮販売による現金収入を目的とした経済活動である。鷹狩猟によって、鷹匠とその家族が口にする獲物を捕獲することはまれである。こうした経済活動としての特化は、酪農生産や食肉飼養などの食料生産を目的とした牧畜活動とは、性質が大いに異なる生業活動といえる。

天山山脈の鷹狩猟に共通して、鷹匠たちの主要な捕獲対象獣はキツネである。かなり平均化した値ではあるが、鷹狩猟による一冬の「あがり」をみてみよう。ベルクッチは1羽のイヌワシを用いることで、一冬に約20~30匹前後のキツネを捕獲することができる。キツネの毛皮は1匹おおよそ1,000ソム(3,000円)前後で取引されている(2

006 年現在)。この捕獲高や毛皮価格は、最近 20 年間でそれほど変動がないと言われている。ちなみにモンゴルのアルタイ・カザフの鷹匠社会でも、このキツネの捕獲頭数はほぼ同じであった。キルギスではソヴィエト時代に各地にあった狩猟者組合（アホータ・ソユーズ）が、毛皮を公定価格で買いとっていた。そのほかバザールで販売されることもしばしばあった。一般的な価格は、キツネ 1 匹 1,000 ソム程度であった。

一冬の捕獲数を 20 匹前後と試算すると、純粋な毛皮販売収入は少なく見積もっても毎冬 20,000 ソム（60,000 円）程度となる。毎冬 60～70 日を狩猟に費やすことを加味すれば、一日 300 ソム（1,000 円）程度の安定した収入をベルクッチたちは期待することができる。この他にもライチョウや、大型のエルク（ヘラジカ）やアイベックス（羚羊）が稀に捕獲され、毛皮の販売とともに、鷹匠とその家族の胃袋を満たすこともある。

さらに、良く訓練されたイヌワシは、オオカミを捕獲することも可能である。イヌワシによるオオカミの狩猟は、鷹匠の腕前や、イヌワシ自身の狩猟能力や性格によりまちまちである。若い未熟なイヌワシでは、オオカミを視認したとしても、襲いかかることにはたいてい躊躇する。しかし多くの狩猟経験をつんだイヌワシや、好戦的な性格のイヌワシは、果敢にオオカミに立ち向かってゆく。鷹狩猟に熟練した古老の話では、自ら育てあげた強いワシで、10 年間に 3 匹のオオカミを仕留めたとのことであった。オオカミの毛皮は 1,500 ソム（5,000 円）程度で取引されており、アルタイ・カザフでも毛皮価格はほぼ同じであった。キルギスの牧畜民にとって冬場の狼害は深刻で、家畜が襲われることはかなり頻繁に起きている。ときにはオオカミが村に入り込んでしまう場合も珍しくない。そのため地元住民によるオオカミ狩りは、ソヴィエト時代から地方でさかんに奨励されている。捕獲したオオカミを役場まで持ってゆくと、捕獲者にはやはり 1,500 ソム程度の報奨金

を出している。特にメスオオカミの場合は大きさに応じて報奨金の額は倍になることもある。オオカミ狩りは、現在は散弾銃などの軽火器と罠で行われている。鷹狩猟によるオオカミ捕獲には、イヌワシ自身も負傷する可能性がある。そのためベルクッチたちも敢えてリスクを冒すよりも、生息数も多く換金性の高いキツネを捕獲対象とする傾向がある。それでもオオカミを捕獲したイヌワシとベルクッチには、周囲から尊敬のまなざしが向けられるという。

このように、鷹狩猟は単純に牧畜活動の「補助」や「副業」とは断定できないほどに、生産性の高い経済活動であることは間違いない。しかしこうした鷹狩猟は、伝統的な牧畜社会の変容や、大型の猛禽の維持費の増大などの社会の変化の過程で、実利との均衡が取れなくなっている。

IV. キルギス鷹狩猟と鷹匠の窮状

キルギスで鷹狩猟が衰退している背景には、ポスト・ソヴィエト時代を経験する社会に典型的な、生業活動の崩壊と社会的混乱があげられる。キルギスでは共和国として独立後、伝統的な牧畜活動の再編成が、鷹狩猟の意義を大きく変化させた。

とくにソヴィエト崩壊による狩猟者組合の解体は毛皮販路を喪失させ、キルギスの鷹匠と鷹狩活動に深刻な打撃を及ぼした。ソヴィエト時代には、狩猟者組合がキルギス全国にオフィスをもち、イシク・クル周辺の主要な地方都市であるボコンバエヴァや Cholpon-Ata にも出先詰所があった。そのため、鷹狩猟が盛んだったイシク・クル湖畔の鷹匠たちは、近郊の町まで足をのばせば毛皮販売を行うことが可能であった。この狩猟者組合の存在により、毛皮価格の変動は小さく抑えられ、安定した販路の存在から、鷹狩猟の「換金性」の高さはある意味では保障されていた。遠く離れたキルギスの天山山脈とモンゴルのアルタイ山脈でも、キツネの毛皮価格の格差がほとんど生じなかつ

たのはこのためである。現在、実働しているキルギス国内の狩猟者組合は、イシク・クル東端のカラ・コルとビシュケクの出張所のみといわれている。またキルギス共和国独立後の相対的な物価上昇に照らし合わせると、鷹狩猟が現状を維持していたとしても、事実上はその生産性の低下を意味している。鷹匠たちの減少と鷹狩猟の非実業化には、ポスト・ソヴィエト時代を経験している地域に典型的な、社会・文化的混乱的一幕が垣間見える。

また意外なことであるが、伝統的な鷹狩猟（イヌワシ猟）は機動性を確保するために、ほぼ必ず騎馬によって狩猟が行われる。このため乗用馬の所有が減少したことも鷹狩猟の存続を困難にしている要因のひとつである。キルギスにおける牧畜社会の再編成は、急速に乗用馬の必要性を損なわせ、生活世界における騎馬の意義を劇的に変容させた。さらに近年、キルギスにはカザフスタンやロシアをはじめ、外国からの馬の買いつけなどが増加し、乗用馬は高値で取引され、その維持・購入も困難になりつつある。

良好な狩場はきまって足場の悪い丘陵地帯や谷あいには広がっているため、むしろ騎馬による鷹狩猟でなければ、狩場へのアクセスと狩猟行為の遂行自体が難しい。さらにイヌワシの捕獲した野獣の確保や追跡、イヌワシの呼び戻しなどは、騎馬以外で行うのは機動性がおおきく制約されることとなり、結果的に生産性が減じられることとなる。最近では、鷹匠たちに乗用馬が所有されることはほとんどない。そのため昨今は自動車の助手席などにイヌワシを乗せて、狩場まで出向くこともある。しかし自動車道が通された人里近辺の狩場では、獲物の出没頻度はおのずと低くなり、狩猟活動としての生産性も低い。これに高騰するガソリン代を加味すると、結果的に割に合わない狩猟活動となってしまう。

またキルギスにおける鷹狩猟の維持・継続には、根本的に牧畜活動が不可欠であると考えられる。

鷹狩猟と牧畜活動は、環境に適応している生態的な特性から、相互に補完的・互恵的な機能を果たしている。1990年代初頭の集約牧畜業の解体により、一時的にキルギスの鷹匠はほとんど絶滅していた。しかし例外的にイシク・クル周辺で鷹狩猟が維持・継続されている背景には、野生の猛禽の良好な棲息地になっていた事は大きい。これに加え、北岸のテルスケイ・アラ・トー、南岸のクンゲイ・アラ・トー山中で、移牧活動が根強く定着していた生態環境もその要因の一つである。

天山山系の北麓における牧畜活動は、なかには2,000m以上の高度差を利用した移牧が行われている。中国のウイグル自治区の伊犁カザフ自治州から、キルギス共和国のイシク・クル、南部のナリン高原に至るまで、家畜飼養にはこの季節移動が採用されている。天山北麓の牧畜活動に携わるおおくの牧畜民が、キルギス人やカザフ人である。冬季のキルギス牧畜民たちは、山から流れ出る河川の河口デルタや河岸平野を冬営地（クシュトー）として居をかまえている。夏季は海拔標高2,500～4,000mの山間の放牧地を、夏営地（ジャイロー）として9月末から10月末まで利用している。

例えば現在イシク・クル北岸で、もっとも良好なタカ・ハヤブサ類の棲息地であるカシャット村周辺には、タカ・ハヤブサ類を所持する鷹匠が今でも活動を続けている。この北部のクンゲイ・アラ・トー山中には、良好な夏牧場を複数有するセミョノフカとグレゴリエフカという2つの代表的な夏営地が営まれている。これら夏営地の入口にあたる山裾は、冬牧場として牧民たちに用いられていた。同時に良好な鷹取場や狩場として、古くから鷹匠たちのあいだでは口承で受け継がれてきた場所でもある。さらにイシク・クル南岸のボコンバエヴァでも、南方に広がるテルスケイ・アラ・トー山中には、広大な夏営地が広がり、現在もキルギスでは有数の夏営地の一つに数えられている。ボコンバエヴァの鷹匠たちのほぼ全てがかつては牧畜民であった。そのため、夏季にイヌワシを連

れて涼しい夏営地へ移動した。冬季にはイシク・クル湖岸の冬営地では、厩舎近くで放牧や牧草給餌による舎飼いが行われ、余った労働力が鷹狩猟へと投入された。

鷹狩猟の遂行は、イヌワシの飼養と冬季限定の狩猟活動という特殊な性質上、夏季の遊牧活動に依存する。乳製品と食肉生産のための牧畜活動と、換金性の高い毛皮商材の獲得を目的とした鷹狩猟は、夏冬それぞれの季節における性質の異なる収益を提供していた。また現金に欠乏しがちな牧畜生活と、食料の安定確保が必要とされる鷹狩猟は、季節の変化によって営まれることで、お互いを安定化させる生業複合としての一つの単位であったと考えてよい。現在イヌワシを所有するベルクッチのいずれも、ジャガイモ、リンゴ栽培、麦作農業、牧草販売などを行っている。なかにはサグンバイ氏のように住居の一部をゲストハウスとして開放し、観光客へ鷹狩を「見世物」として運営するなど、イヌワシの所有を維持するために牧畜活動に代わる「生業」を模索しなければならない現状がある。キルギスの鷹狩猟の存続には、遊牧活動に代わって鷹狩猟との相補性を発揮できる生産・経済活動の開拓が、今後の重要な焦点になると考えられる。

V. おわりに—文化遺産としての鷹狩猟

キルギスでは鷹狩猟を自らの伝統として位置づける意識は、鷹匠たちにわずかながら保持されている。しかし伝統や文化遺産保護としての組織的な活動を起こせるほどの経済的な体力はない。また国家的枠組みでの政治的、資金的なサポートもほとんど期待できていない。キルギス人自身も鷹匠や鷹狩には冷静で、たとえ近所に鷹匠が住んでいようと、それほど注意を払うことはない。都市に住む多くのキルギス人たちの目には、鷹狩は好事家の「娯楽」と映えるようになってしまっ

ている。鷹匠の文化と鷹狩猟の技術は、文化資源としての大きな可能性を有しながら静かに、しかし確実にキルギス社会から消滅しようとしている。現代社会は生活を直接支える生業活動の価値に対して、とかく無頓着になっている。この意味で、過去の狩猟方法や農耕技術の復元に熱心な考古学者は、人類史のもっとも根源的な生活価値に重きを置いているのかもしれない。文化遺産としての鷹狩猟の可能性は、人間がイヌワシを家畜化することで、類まれな狩猟技術と生活世界とを築き上げた点にある。希少性だけを遺産概念の価値体系に位置づけることは容易ではあったとしても、かつての好事家たちが躍起になった「死んだ遺物」の収集作業となんら変わらないだろう。人間がイヌワシとの共存を現在進行形で実践する文脈にこそ、生活世界に息吹く鷹狩猟の文化資源としての価値の地平が見出されるべきである。「失われた過去の技術」か「生きた現在進行形の伝統技術」か、を問う文化救済の民族誌という目的志向は、今では人類学者に採用されることはおそくないのかもしれない。それでも二者択一の選択を間近につきつけられているならば、人類史上の類まれな生業活動を文化遺産として価値づけ、保護存続させること—民族誌の記録を含めてだが—は十分な説得力を持つことになるだろう。

参考文献

- クリフォード, J.& マーカス, G.E. (春日ほか訳)
1996 『文化を書く』紀伊国屋書店
クリフォード, ジェイムズ
2003 『文化の窮状』人文書院
佐藤俊 (編)
2002 「遊牧民の世界—生態人類学(4)」京都大学出版: 6-7
Soma, Takuya
2006 *Ethnographies of Kirghiz Falconry &*

Falconers and its Transition- The Cultural Distinction of Nomads Hunting Arts along the Mountainous and Steppe Silk road In Berikii Sherokovi Puti Kurutura i Traditsii - Proshloe i Nastoyashee: Materialy Nauchno-Teoreticheskoi Konferentsii 2006; Tashkent, Academy of Uzbekistan, UNESCO, Caravan-Sarai.

吉田順一

2005 「内モンゴルにおける農耕と漢式農耕の需要」『早稲田大学モンゴル研究』第2巻：59-70